

日本海に面する山口県下吉見地区の貝類相*

吉田 裕・網尾 勝・野島重昭

Shell Fish Fauna in the Japan Sea off Yoshimi in
Yamaguchi Prefecture

By

Hiroshi YOSHIDA, Masaru AMIO and Shigeaki NOJIMA

Concerning the faunal area of shell fish, the Japan Sea may be divided into three parts located in lat. 35° N, lat. 41° N and lat. 46° N, respectively (Fig. 1). The shell fish fauna of Yoshimi district much resembles that of Onomichi in the Inland Sea of Seto which is adjacent the former. In these districts, the southern species are predominant, in number, coming next to the species which inhabit both southern and northern districts, but the northern species do not appear (Table 1). Also, the species occurring in Yoshimi district are 69.0% similar to those of Onomichi, and 80.5% similar to those of Wagura, Noto Peninsula (Table 2). The above-mentioned faunal area of shell fish in the Japan Sea agrees well with the conditions of ocean currents. The Tsushima Warm Current runs northward along the coast of the Japan Sea, warming the sea especially to the south of Shimane Prefecture. This makes us draw a remarkable line of distinction in the shell fish fauna between Shimane and Noto Peninsula. The branches of the current come up to the north passing the Straits of Tsugaru and Soya, showing the limit of distribution of shell fish in the northern Japan Sea.

緒 言

本所の所在地吉見地区は日本海に面する本土の南端に近く、直接対馬暖流に洗われると共に、瀬戸内海とも区域を接するため、海況上その影響も免れ得ない地区である。従つて海産生物相もそれらの海況に相応じた様相を呈しているであろうことは想像に難くない。よつて先づその点を明らかにして置くことは此の地にあつて今後海産生物を対象として生態的或は応用的の諸問題に関する研究を進めて行くためには先づ第一に手をつけておかなければならないことである。此のような考えに基き筆者等は先に此の地区の魚類相¹⁾につき報告したが、今回は貝類相について検討を試みた。先づ日本海全体の貝類相につき考え、次に吉見地区の状態を日本海の他の部分及隣接する瀬戸内海の状態と比較検討した。

*水産講習所研究業績 第238号, 1957年7月25日 受理

日本海に於ける貝類分布区の区分

日本海全体に亘る貝類相を検討するため、黒田・波部両氏 (1952)²⁾ によって日本海から記載された而かも分布の北限が判然としているもの 1275種、南限が判然としているもの 1280種を拾い、緯度1度毎にその分布を分けると第1図の通りである。即ち南から北に亘って分布する

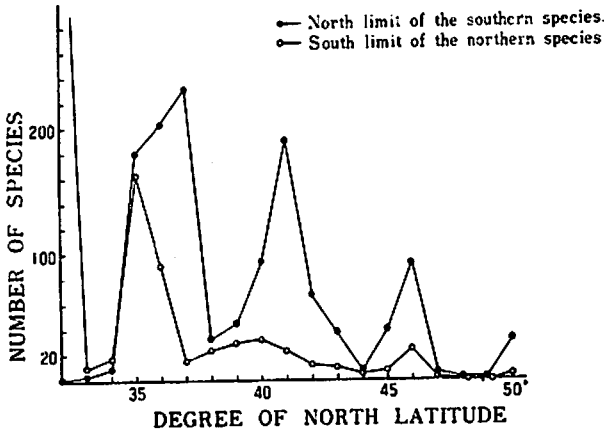


Fig. 1. Showing the limit of the distribution of the shell fish on the coast of the Japan Sea.

種類の北の限界は先づ、島根県の江津附近 (35°N) から能登半島の中部 (37°N) に最大の山があり、次いで津軽海峡 (41°N)、宗谷海峡 (46°N) と相当歴然とした山が相次いでいる。北から南に亘って分布する種類の南の限界は、江津附近 (35°N) に著しく明瞭なものが見られ、秋田県八郎潟附近 (40°N)、宗谷海峡 (46°N) には共に不顕著ながら山が見られる。更にそれら南限及北限の両方を併せて、日本海全域に亘る貝類分布上の大きな区分を求めると、

35°, 41°, 46° にその限界を認め

ることが出来るが、その中でも35—37°N に南北の最も顕著な限界を見る。依つて、南から北に亘って分布する種類で、分布の北限が36°N以南にあるものを南方種 (S)、北から南に亘って分布する種類で分布の南限が37°N 以北にあるものを北方種 (N)、それらの限界を越えて分布するものを共通種 (T) とすれば、各 S—395種、N—190種、T—690種となる。

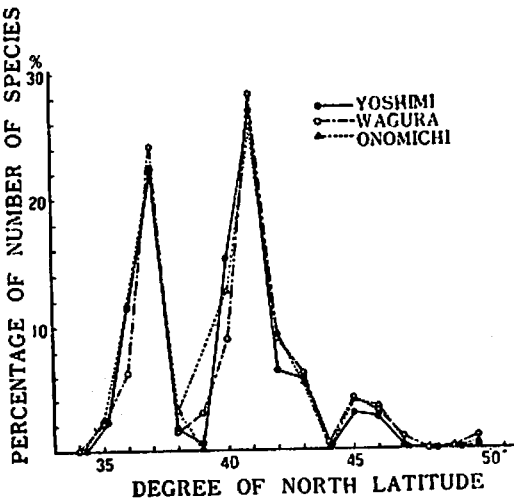


Fig. 2. Comparison of the limit of the distribution of shell fish in Yoshimi district with Wagura (the Noto Peninsula) and Onomichi (the Inland Sea).

Remarks: Only the north limit of the southern species.

吉見地区と他の地区に於ける貝類相の比較

吉見地区の貝類相を他の地区のそれと比較するため、筆者等が吉見地区で採集調査した資料と能登半島の和倉 (伊藤, 1954)³⁾ 及吉見に隣接する瀬戸内海の尾道 (滝, 1936)⁴⁾ の状態と比較した。吉見 302種、尾道 218種、和倉 189種につき南から北に亘って分布する種類の北の限界を図示すると第2図の通りで、大体海浜で容易に採集される種類が主であるため図のように一致の傾向が強いが、3地

区共貝類相は極めて類似しているといえよう。次に以上の3地区に於ける南方種、北方種、共通種の比率を比較すると第1表の通りで、3地区共通種が最も勝り、次いで南方種が優勢である。吉見及尾道は特に類似し、共通種及南方種の比率も極めて近似し、共に北方種は見られない。和倉ではそれらに較べると南方種の比率が減り、僅かではあるが、北方種も現われている。

次に吉見、尾道、和倉各地区の状態を主体（上欄）として、各吉見、尾道、和倉（左欄）の状態と比較すると第2表の通

Table 1. The faunal distribution of shell fish in various localities of the Japan Sea.

Loc.	Item	S	T	N	Total
Wagura	No. (%)	15 (7.9)	172 (91.0)	2 (1.1)	189 (100)
Onomichi	No. (%)	30 (13.8)	188 (86.2)	0 (0)	218 (100)
Yoshimi	No. (%)	42 (14.0)	260 (86.0)	0 (0)	302 (100)

Remarks : S Southern Japan form; T Through out Japan form;
N Northern Japan form.
Expecting the species described only Pacific regions in
check list (KURODA and HABE, 1952).

Table 2. Comparison of species concerted in each locality.

Loc.(1) Loc.(2)	Yoshimi		Onomichi		Wagura	
Yoshimi	66(19.5%)	104(31.0%)		194(70.8%)		135(62.0%)
Onomichi		231(69.0%)	169(61.6%)	80(29.2%)	102(46.8%)	
Wagura	269(80.5%)		105(38.4%)		116(53.2%)	83(38.0%)
Total	235(100%)		274(100%)		218(100%)	

Remarks : Loc. (1) Subject; (2) Object.

りである。ここでは吉見地区で採集されたもので、和倉（伊藤）、尾道（滝）の目録に挙げてないが、全日本（黒田・波部）の目録に依れば当然その地区に分布していると思われる種類は、比較的便宜上夫々和倉及び尾道の種類の中に加えて扱った。その結果、吉見地区に於ける同一種の分布状態は尾道とは69.0%、和倉とは80.5%、尾道では吉見と70.8%、和倉と38.4%、和倉では吉見と62.0%、尾道と46.8%共通である。従つて吉見は尾道よりも和倉、尾道は和倉よりも吉見との関連性が強く、和倉もまた尾道よりも吉見と関連性が強い。

日本海の貝類相と海況との関連

筆者の一人吉田（1957）¹⁾ は魚類の分布上日本海を3区に分け、その状態がよく日本海の家況と関連することを述べたが、筆者等がここに述べる貝類相もまた日本海の家況と関連性が強い。即ち日本海沿岸を南から北に北上を続けている対馬暖流の勢力は、特に島根以南では卓越し、周年暖流系の水を湛えていることは、南から北に亘つて分布する貝の種類と北限が島根県江津附近から能登半島の間に最も多く存在することとよく一致する。対馬暖流は更に北上を続け、津軽海峡及び宗谷海峡に遡入り込んで、ここで夫々支流を形成していることは、津軽及び宗谷の両海峡の部分に貝類分布上の顕著な限界が見られることとよく合致する。これらの状態

はまた滝庸氏 (1939)⁵⁾ が説くところとも一致する。

文 献

- 1) 吉田裕・伊藤健生：1957. 日本海の魚類相. 本報告, 8(2).
- 2) KURODA, T. and HABE, T. 1952. Check list and bibliography of the recent marine mollusca of Japan. Tokyo.
- 3) 伊藤勝千代：1954. 能登和倉海産貝類目録. 日本海区水産研究所研究年報, 1.
- 4) 滝 巖：1936. 尾道近海産軟体動物目録.
- 5) 滝 庸：1939. 本邦近海に於ける軟体動物分布の諸型. 日本学術協会報告, 14(2).
- 6) 宇田道隆：1934. 日本海, 黄海, オホツク海の平年各月海況. 水産試験場報告, 5.
- 7) 岡村金太郎：1931. 海産植物の地理的分布. 岩波講座, 地理学.
- 8) 山口博物館：1956. 山口県産貝類目録.